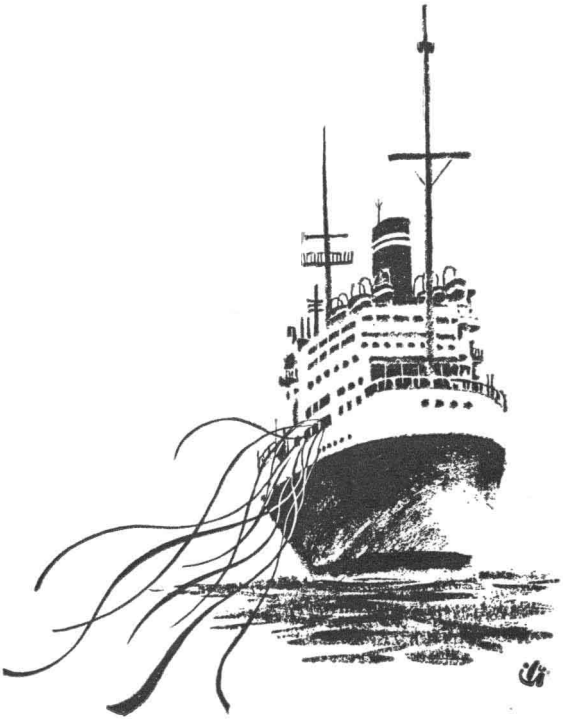
里子の旅は船でゆく

斉藤さとこ

里子の旅は船でゆく



里子の旅は船でゆく

頒価　950円

昭和59年2月15日　発行

著　者
発行者　斉藤さとこ

〒102 東京都千代田区四番町7番地7

制　作　主婦の友出版サービスセンター

〒101 東京都千代田区神田駿河台1－6
TEL (03)294－1111

印刷・製本　星野精版印刷株式会社

© SATOKO SAITO 1984 Printed in Japan

はじめに

わたしの人生って何だろう。これでいいのだろうか。ふっと考えることがある。仕事の疲れ、自己嫌悪など、日々感じることはあっても、自分の可能性を信じながら歩んだ二十年である。しかし今、ふり返ってみると、何となく過ごしてきてしまった気がする。何かをしたいという意欲はありながらも、向けるべき的が定かではない。「これが私の生き甲斐です」と言えるものがない。謡(うたい)をやってもお習字をやっても、水墨画を習っても、自分の生き甲斐とするには、何かピタッとはこなかった。「なんとなくはじめて十年が過ぎました」というのが実感である。

教室で意欲とエネルギーそのものの生徒たちをみていても、学校の勉強や放課後の班会議、委員会など過密なスケジュールのために、好きなクラブ活動も充分にはできないで、家に帰ると、塾やお稽古に通う。これを繰り返すだけの生活のようである。縛られた日課に真面目に取り組めれば誉められもし、期待もかけられる。でも、自分でやったという実感が残らない。充実感がないようである。それでも真面目に取り組める生徒ならいいが、取り組めない生徒はどうなるのだろうか。

何となく気が進まないから、学校への道を変えて、港の船を眺めて家に帰ったら、「怠学」という理由で親にチクられた。

職員室で先生が旨そうにタバコを吸っている。家でもお父さんが気持良さそうに煙をぷーっと吹いて肩を楽にした。どんなものかとみんなのいないときに一服してみる。苦くて不味いと感じればよいが、旨いと感じた生徒はどうするのか。

細かい風紀規則の違反まで考えたら、誰もが一度や二度は経験しているだろう。中には風紀違反と知りながらも、してみたいと思うことはあるようだ。でも、好奇心だけで終わる生徒もいる。やってしまってからでも、自分で反省できる場合はいいが、自分がやったことの良し悪しが自分で判断できないとき、どうしたらいいのか。悩み考えることは大切なことであるが、そんなとき、自分から離れて自分を見つめ直してみることも大切なことだと思う。

力み過ぎては自分が苦しい。かといって、無気力な人生もつまらない。平凡に生きることは努力のいることであり、おろそかにはできない。平凡な中に個性を生かした生活ができれば幸せである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

私のこれからの人生をどう生きていくのか。ここに一つの区切りをおき、私の二十年の教員生活の断面を、一冊にまとめ、自分をふり返り、新たな自己改革への挑戦を試みたいと考えた。具体的な方策はない。何を書けばいいのか、どう表現したらいいのか、全くわからないが、日頃、生徒たちに、

「何事も努力してみてから、できないと言うものです」

と言って、自分ではやってみようとさえしないままで一生を終えるのも、何か口惜しい気がする。

「まずは書いてみることです」

と言われた先輩の言葉に励まされて、旅の思い出を書いてみようと思った。

昭和四十二年から四十三年にかけて、台湾、香港、マカオ、マニラへの船旅をした。

私にとっては、外国旅行も、十七日間という長い船旅も、はじめての経験であった。そのときのさまざまの見聞や、船での共同生活は、その後の私に、いろいろと影響を与えている。ラジオも聞かない、新聞も読まない、動く孤島の住民の心理に近い船での生活。空と海だけの明け暮れを、どんな風に過ごしたか。乗船した人たちにはどんなことがあったのか。どんな船旅だったのか。今、思い出しながら、それを綴った。

「船旅の経験を本にしたい」
と友人に語ると、
「船旅に興味をもつ人は少ないと思うわよ。せっかく本をだすんだから、学校での生徒のようすも書いてほしいわ」
一口に学校での生徒のようすを書く、といっても、作文力のない私には、大変な難問である。全く、未知なるものへの挑戦ということになる。生徒との対話の中から、いろいろな方との出会いの中から、ヒントを得て、周囲の方々の暖かい助言を大切に、日頃の私の想いを、「親の知らない子どもの世界」にまとめてみた。
「終業式の午後」を書いて、今は亡き校長先生が、現在の教育現場にいらっしゃったら、どう対応されるのか、それを考えながら、校長先生の思い出を、「教師の旅のはじまり」の中に書いた。
「修学旅行」は、四十六年三月に行なわれた九州旅行の体験である。旅行中に、急性虫垂炎になった生徒、そして、横浜の両親が、そのときどうであったのか、うすらいだ記憶をもとに、フィクションにまとめてみた。
現場の教師という立場から、言いたいことも充分言えなかったこと、また、書きたいと

思いながらも、作文力の限界から書き尽くせなかった点もある。

しかし、本を出したいという気持の裏には、今、何をしなければならないかという思いがあり、まわりくどくなっている部分もあるが、お読みいただければ幸いである。

昭和五十九年初春

著　者

□里子の旅は船でゆく□目次

はじめに――1

旅に消えた恋

終業式の午後――13
同室になった和代――21
クリスマスパーティ――26
ダンスのあとで――31
船で迎えた朝――36
バスの中で――43
メンバーのプロフィル――47
大陸の子どもたち――53
香港の沖で53／アバーデーンへの道56
絵はがきを売る子ども58／カジノで見た少女61

水中翼船を降りて――63
曲芸師――67
マニラで見たもの――69
日没の出航――74
新年パーティ――76
自由行動の朝――80
ショッピング――83
旅に消える恋――87
楽しかったトニー――95
ハワイアンダンス95／フェミニスト98
雨の長崎――100
船旅の終わりに――103

教師の旅のはじまり

人生の転機――109

パリーからの絵はがき——113
生徒指導で——117
クラブ顧問のこと——120

修学旅行

親と子——129
お城の桜——137
葉桜の学園で——140

親の知らない子どもの世界

母親が自信をもって生きる——147
センスを育てる——150
勉強しなければ自由——156

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

天に向って唾をする……162
美しい顔……171
親の厳しさとやさしさ……179
テストのあとで……184
在学中に学ぶ……187
これからのクラブ活動……191
「叱る」と「怒る」……194
あとがき……197

イラスト……山岡勝司

旅に消えた恋

終業式の午後

「里子先生」

教室から職員室に戻った里子に、小宮山先生はニコニコしながら声をかけた。

「先程、校長先生が見えて、『里子先生、まだ学校にいるのかね』って聞かれたのよ。何か用事があるんじゃないかしら?」

里子の前の机で仕事をしていた佐伯先生が顔を上げ、にっこりして、

「それ、きっといいお話よ。校長先生のお顔がとても明るい表情だったから、お婿さんの話かも知れないわよ、ね」

里子に言ってから、佐伯先生は小宮山先生に同意を求めた。

「そうかしら?」

小宮山先生は首を傾げて、佐伯先生と里子の顔を見た。

「早く行ってごらんなさいよ。お帰りにならないうちに行った方がいいわよ」
佐伯先生は興味深げに、半ばせき立てるように言った。里子は二人の先生の言うことをうのみにするというのではないが、年頃の娘心というのだろうか、内心では校長からどんないい話があるのかと、足どりも軽く職員室を出た。その後姿を見送って、
「お婿さんの話というのは、佐伯先生の考え過ぎじゃないの」
「そりゃ、行ってみないと何とも言えないなあ」
そんな対話に続いて、同僚の愉快そうな笑い声が廊下にまで流れ出していた。
校庭の歩道を生徒たちがグループをつくって語りながら歩いて行く。そして、楽しそうに正門を出て行く生徒たちの後姿を窓越しに見送っている校長の背に、
「校長先生っ」
里子は声をかけた。校長が振り向くのを待って、
「なにかわたしに……」
会釈して言いかけたが、校長はまた窓の外に目をやってしまった。
「なにか……ご用でしょうか」
何となく不安な気持になりながら、もう一度言うと、校長は窓の方を向いたまま、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c